「主イエスの服に触れる女」　2023年04月19日

この女が後ろから近寄って、イエスの衣の裾に触れると、たちまち出血が止まった。イエスは、「私に触れたのは誰か」と言われた。皆自分ではないと言ったので、ペトロが、「先生、群衆が取り巻いて、ひしめき合っているのです」と言った。しかし、イエスは、「誰かが私に触れた。私から力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、イエスに触れた理由とたちまち癒された次第とを、民全員の前で話した。イエスは言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい 。」 （ルカ８：44～48）

主イエスは、会堂長ヤイロの家に向かっていた。その途中、大勢の群衆が周りを取り囲み、押し合いへし合いしながら、歩んでいた。ここに、12年も出血の止まらない婦人病を患った女性がいた。彼女は医者に診てもらい、祈祷師に祈ってもらったが、癒えることはなかった。全財産を使い果たし、経済的に貧しくなってしまった。出血が続いているので、いつも血色が悪く、倦怠感に襲われていただろう。また、婦人病なので、恥ずかしく人に話せず、結婚もできない。レビ記15章に、出血は月経と同じように「汚れ」と見なされ、人と接することも、彼女が使ったものに触れることも許されないと規定している。彼女は汚れた女として宗教的にも排除されていた。経済的、身体的、家庭的、宗教的にも、あらゆる面で困難を負っていた。彼女は自分の人生をどれほど辛く思っていたであろうか。

彼女は、病気を癒やされる主イエスが来られたことを知った。この時、主イエスに癒していただこうと、心を決めた。群衆をかき分け、後ろから主イエスに近づいた。そして、そっと、主イエスの衣の袖に触れた。婦人病だったので、声を出して、癒やしを求めることはできず、無言で、しかし、必死の思いで、衣の裾に触れたのである。針の先のように鋭く、研ぎ澄まされた信仰であった。主イエスの衣の裾は、宣教で歩き回り、埃まみれであっただろう。その衣の裾に触れた瞬間、彼女は出血が止まったのを感じた。すると、主イエスは振り返り、「私に触れたのは誰か」と言われた。周りにいた者たちは自分ではないと言った。主イエスがしきりに探すので、ペトロは、「先生、群衆が取り巻いて、ひしめき合っているのです」と、群衆が周りに押し寄せてきているので、誰が触れたか分かりませんと答えた。しかし、主イエスは、「誰かが私に触れた。私から力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。多くの人たちが主イエスに触れていたが、力が出て行くのを感じる触れ方をした人がいた。主イエスは、その人を探し出そうとしておられた。出血を癒やされた女は隠しきれないと知って、震えながらひれ伏し、主イエスに触れた理由とたちまち癒された次第を、主イエスとその場にいた人々に打ち明けた。すると、主イエスは、「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた。何と優しい言葉であろうか。12年も出血が続いていたので、年も重ね、顔色も娘のような明るさはなかったであろう。しかし、「娘よ」と呼びかけ、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と、彼女のひたむきな信仰を顧みて、安心して行けと言われた。

教会には救いを求めて多くの人が見える。また、生きる確かさを得たいと聖書を読む人は多い。その時、主イエスとどのように向き合うか。その向き合い方によって、主イエスから力を受ける者とそうでない者に分かれる。救いは神から来るのであるが、救いに与る者には、砕かれた一途な求道があることを、彼女から示される。